

[22]

氏 名	たなべ さち 田邊 咲智
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第 63 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	菱田春草の絵画表現における同時代性 —日本美術院の理想をめぐって—
論文審査委員	主査 教授 藤田 高夫 副査 准教授 池尻 陽子 副査 助教 吉川 和希 専門審査委員 名誉教授 中谷 伸生

論文内容の要旨

田邊咲智氏の学位論文「菱田春草の絵画表現における同時代性—日本美術院の理想を巡って—」は、日本画家 菱田春草（1874—1911）の絵画表現を、日本画と洋画、米・欧州の西洋絵画からの直接的・間接的影響関係を分析し、春草の絵画表現の特質を同時代性という観点から検証しようとするものである。以下に論文の構成と各章の概要を示す。

序 論

第一章 初期作品について—東京美術学校時代を中心に

第二章 日本絵画協会—絵画共進会を中心に

第三章 春草研究における朦朧体の諸問題

第四章 日本美術院の課題制作と朦朧体

第五章 菱田春草《王昭君》の明治絵画における位置

第六章 菱田春草の欧米遊学と朦朧体の同時代性

第七章 朦朧体から落葉へ—同時代性をめぐって

結 論

序論では、先ず従来の春草研究を（一）評伝と作品研究、（二）朦朧体に関する研究、（三）五点の落葉の作品研究に大別し、朦朧体の研究と落葉の作品研究に主眼がおかれていたと総括した上で、朦朧体から落葉に至る春草の造形思想の変化の過程、岡倉天心をはじめとする日本美術院の理想との関係になお探求すべき課題があることを示す。次いで本論文の視

点として、春草における伝統と西欧の二面性、および欧米遊学を転機ととらえ同時代絵画の直接的・間接的影響の分析を挙げ、従来の春草をめぐる比較研究の限界の超克をめざすことが述べられる。

第一章では、東京美術学校卒業までの春草の初期作品について論じる。本章では、東京美術学校入学までの春草の経緯を辿り、次いで、東京美術学校の絵画科（日本画科）の教育課程を考察する。特に、卒業制作《寡婦と孤児》に注目するとともに、この時期の岡倉の理想にも考察を加える。

第二章では、日本絵画協会が主催した〈絵画共進会展〉の出品作品について論じる。春草が発表した《四季山水》、《拈華微笑》、《水鏡》といった作品は、伝統絵画にはない図様かつ暗示的な表現を用いて描かれた作品であり、日本画の新たな方向性として岡倉が目指した「理想画」の先駆けとなったと評価する。とくに第一回展は、洋画家の黒田清輝が率いた「白馬会」と合同で開催され、岡倉と黒田の間に交流があったことが示唆され、二人の交流を発端として、その後の朦朧体の画風に何らかの影響が及んだことが推察される。

第三章は、春草研究の主要なテーマであった朦朧体の研究史について論じる。本章ではまず、これまでの朦朧体の言説を整理し、春草研究における朦朧体の諸問題を指摘する。

第四章では、日本美術院の課題制作と朦朧体の展開について論じる。日本美術院の内部では、課題制作が実施され、ここで岡倉は、画家たちに具体的な指導をおこなっていた。本章では、日本美術院の課題制作の特性を考察し、春草の作品を基点として、日本美術院が目指した朦朧体の表現性を明らかにする。

第五章では、春草《王昭君》の明治画壇における位置について論じる。本章では、日本美術院の課題制作、日本美術院の歴史画の特質、同時代の日本画や洋画との比較を通して、《王昭君》の明治画壇における位置を明らかにする。

第六章では、朦朧体とホイッスラーらが展開した「トナーリズム」の作風が、同時代的な特質を有して展開した諸相について論じる。具体的には、春草らが辿った遊学の経路を再検討し、朦朧体の表現に何を追究していったのかを考察する。また、当時、欧米で朦朧体がホイッスラーの作風と同じ位置で評価された点に着目し、両者の作風が同時代的に近似した要因について考察する。

第七章では、《落葉》（文展作品）を基点に、春草晩年の思考について論じる。《落葉》は網膜炎によって半年余り作品制作の中断を余儀なくされた春草が、代々木付近の雑木林を散歩して自然観照に耽った療養生活を経てから制作された。本章では、療養中、自然観照に没頭した春草の心理的な状況を踏まえて《落葉》を考察し、春草晩年における造形思考の深化を考察する。ここでは、《落葉》の空間構成に近似する作品が、江戸琳派、同時代の日本画や洋画、ジャポニスムを通じて日本美術の影響を受けた西洋絵画にまで見出せることに着目し、それぞれの空間構成を比較して《落葉》の位置を検討する。そこから、日本美術と西洋美術の衝突、あるいはその融合を経て発生した「同時代性」を、間接的な影響関係を手掛かりに明らかにする。

結論では、各章の議論を総括した上で、従来の研究の限界を超克するための本論文の独自の視点、すなわち同時代性を軸に春草作品を検討することの方法的有効性が提示される。

論文審査結果の要旨

本論文の学術的価値と独自性は、なによりも同時代性という視点を導入して菱田春草の絵画表現の生涯を通じての変遷過程を検証したところにある。

従来採りあげられることの少なかった初期作品を含めて検討した第一章・第二章においては、岡倉天心らの引力圏のなかにあつて、日本画、西洋絵画の直接的・間接的影響を考慮しながら、岡倉の「理想画」との関係性を考察し、春草の創作活動全般を視野に入れた議論のための土台を提供している。

第三章から第五章は、春草研究の主要テーマであつた朦朧体について、従来の概念規定の曖昧さを踏まえたうえで、岡倉のみならず黒田清輝の影響と視野に入れて、朦朧体に関する議論に新しい局面を拓くことに成功している。

本論文の白眉は第六章・第七章であろう。欧米遊学においてホイッスラーのトーナリズムとの邂逅から、東西の美術作品が接触した際に創出される同時代的特質の発見を摘出しえたことは、本論文の大きな成果である。さらにこの同時代的共時性を晩年の《落葉》の分析を敷衍させて論じた第七章は、洋の東西を越えた共時性を提示した点において、挑戦的で壮大な構想の見取り図となっている。

一方、個々の章の論述は明晰で論理的であるが、論文全体としては、例えば黒田清輝の影響をどう捉えるかなど、記述において若干のブレが見受けられる。また、春草自らが自己の絵画表現を言語化した資料が乏しいこともあつて、本論文での論証には一定の限界が存在することも否めない。さらに同時代性・共時性の観点から春草晩年の絵画表現の変化を解釈する観点は、説得的ではあるがなお実証には埋めるべき問題点が残されている。

しかしながら、本論文が朦朧体、あるいは《落葉》に関する従来の研究の問題点を克服して、春草研究が新たな段階に進む確固たる道標となることは疑いない。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。